

学生海外調査研究	
グリーグ・アカデミー音楽療法研究センターにおける臨床研究 -文化中心音楽療法を基盤として-	
生野（山本） 里花	比較社会文化学専攻
期間	2011 年 11 月 27 日～2011 年 12 月 9 日
場所	ノルウェイ、ベルゲン
施設	ベルゲン大学グリーグ・アカデミー・音楽療法研究センター

内容報告

1. 今回の海外調査研究の必要性と目的

筆者が現在取り組んでいる博士論文は、音楽療法臨床プロセスのキーワードを「関係」と「意味」と仮定し、ひとつの事例を深く解釈することで論じようとするものである。日本の音楽療法現場は、コンテキストに特定のプロセスを重視するなど、質的研究や構築主義的視点に適すると思われる形態が大半を占めるのにもかかわらず、それについての研究方法が確立しているとは言えない。そこで今回、こうした音楽療法臨床や研究方法を「文化中心音楽療法」という概念の下に育ててきたスティージェ博士(Stige, Brynjulf) とベルゲン大学(University of Bergen)グリーグ・アカデミー・音楽療法研究センター(Grieg Academy Music Therapy Research Center, GAMUT)を訪れた。

スティージェ博士は、もともとソグン・フィヨルダネ大学(Sogn og Fjordane University College)でコミュニティ音楽療法を中心とした研究と教育を始め、その後ベルゲン大学に音楽療法学部とGAMUTを設立した。GAMUTは、世界の音楽療法論文誌の中でもレベルの高さと柔軟なアカデミズムで知られるNordic Journal of Music Therapyと、文化中心音楽療法の視点に立ったインターネット・ジャーナルVoices, A World Forum for Music Therapyの発行元でもあるが、両者とも、ノルウェイという地盤を大切にしながらも英語を主言語とし、インターネットを活用して世界に向けた対話的研究姿勢をとっている。また、伝統的には質的な立場に立ちつつも、量的視点も含めた包括的な視点から音楽療法を概観した積極的な展開が見られる。

さらにGAMUTは1年半前から、「学際的音楽研究のためのグリーグ・リサーチ・スクール」(Grieg Research School for Interdisciplinary Music Studies, GRS)と称する新しい試みを始めた。これは、ノルウェイ西部及び国外の大学から音楽演奏、音楽教育、音楽学、音楽療法の各分野の博士課程学生が集って研究を発表し合い、また教授陣の基調講義を聞くセミナーで、ここでも、そのレベルと指向において国際的な質をめざすことが謳われている⁶⁾。2010年12月にオープニング・セミナーが「音楽の意味-音楽の効果」("Meaning of music -Effect of Music")というテーマで、2011年6月に第2回が「美的及び創造的学びのプロセス、すべての人に？どこでも？」("Aesthetic and Creative Learning Process, For All? Anywhere?")のテーマで行われたのに続き、今回が第3回、テーマは「感情と音、自己と社会を演ずること」("Performing Sentiment and Sound, Self and Society")であった。

筆者は、今回、GRSの発表者の一人として参加するとともに、セミナー後、GAMUTの教授らと博士論文プロジェクトについて意見を交わすこと、またノルウェイの今日の音楽療法臨床を見学することを目的として、ベルゲンに12日間滞在した。なお、この調査研究は、本学「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「海外学生派遣プログラム」によって可能となったことに、深く感謝の意を表したい。

2. 調査研究の日程

11月28日～12月1日

- ・ GRS 第1～第4日

12月2日

- ・ ベルゲン・サイエンス・センター(Bergen Science Center VilVite)における音楽療法カンファレンス

12月5日

- ・ベルゲン大学病院小児科病棟の音楽療法臨床見学
- ・米国ドレクセル大学（Drexel University）大学、ブラット博士（Brad, Joke）の講義「近年のコクラン・レビューにおける音楽療法」

12月6日

- ・GAMUTにて研究に関するコンサルテーション
□□ ギルバートソン博士（Gilbertson, Simon）
- ロブソルド博士（Rolvjord, Randi）

12月7日

- ・ファガトゥン幼稚園（Fagertun Kindergarten）における障碍児の音楽療法臨床見学
- ・GAMUTにて研究に関するコンサルテーション
□□ シュミット博士（Schmid, Wolfgang）

3. 執筆中の博士論文について

筆者の博士論文プロジェクトは、これまで以下のように進行してきた。

- ・第10回日本音楽療法学会発表
「重度発達障碍児との個人音楽療法における関係の発展-セラピストとクライアントの両方に焦点を当てて-」¹⁾
この発表では、臨床者としての「関係」への視点を、「治療する者」としてのものから、「その場に（巻き込まれて）居る者」としてのものに転換し、「関係」の多層的あり方を探った。
- ・第42回日本芸術療法学会発表
「関係性と意味性-重度発達障碍児との個人音楽療法の一場面の解釈の試み-」³⁾
この発表では、「関係」に焦点を当てて、約1分間の音楽療法臨床場面を解釈する方法を試案した。

今回は、この解釈方法の試案をさらに進めるための予備研究「ある重度知的障碍児との音楽療法における『意味』の位置づけ-その多層性と研究方法の可能性-」をGRSで発表し、またGAMUTの教授陣に意見を求めた。

4. 筆者のプロジェクトに深く関連するいくつかの概念について

GRS, GAMUT という環境においては、音楽療法を「関係」と「意味」から研究するという筆者のテーマ設定は、異論なく受け入れられた。その中でさらに、以下のような関連する概念が論じられていることに興味を抱いたので、これからの研究に含めていきたいと考えている。

4.1 医療における「意味」と音楽療法

ノルウェーの音楽療法の第一世代とも言えるルード（Ruud, Even）は、1970年代の著書で音楽療法臨床を医学モデル、精神分析的モデル、行動療法的モデル、人間性心理学的モデルの4つの視点から論じた。その中でルードは、音楽の「生理学的・心理学的反応」にのみ存在価値を置く初期の医学モデルを批判しており、その先に「コミュニケーション」や「コミュニティ」といった音楽療法の新しい概念を想定していたことが読み取れる¹⁰⁾。

1980年代に入ると、イスラエルの医療社会学者アントノフスキー（Antonovsky, Aalon）が、従来の医療を「疾病生成モデル」と名付け、それに対する視点を「健康生成モデル」として提唱した。前者が「何が人を病に追いやり、どのようにその原因を取り除き、健康な人をいかにその原因から隔離するか」を問うのに対し、後者は「健康な人が健康を生成するための営みとは何なのか」「何が人の健康を作っているのか」を問うもので、そのキーワードとなるのが「首尾一貫感覚」（sense of coherence）とされる⁴⁾。音楽療法領域では、アメリカの研究者ブルシア（Bruscia, Kenneth）が「音楽療法を定義する」の第二版（1998）の中で重要な概念として取り上げ、音楽療法のプロセスの画期的な理解体系を作った⁵⁾。

上記のような、音楽療法研究の焦点を「結果」から「プロセス」に動かそうとする考え方の流れは、今回、ブラット博士の発表や講義の中に、強く現われていた。ブラット博士は、コクラン・レビューで医療における音楽療法のEBMの結果を調査した際、EBMの論文のベースになっている音楽療法臨床の技法がCD聴取などに限定されており、実際に医療現場で行われている、はるかにインターアクティブな技法との落差が大きいことのジレンマに触れた。そして音楽療法が最も力を発揮するのは、このインターアクティブなやりとりによる「意味」（meaningfulness）の感受であるとの考え方を強く示唆した。

筆者の論文で扱う症例は医療における音楽療法ではないが、「音楽の何がクライアントに変化をもた

らすのか」という共通した議論が広がりつつあることに関心をひかれた。

4.2 リソース指向の音楽療法

ベルゲン・サイエンス・センターにおける音楽療法カンファレンスで GAMUT のロブソルド博士が取り上げた「リソース指向の音楽療法」(resource oriented music therapy) も、この近隣に位置づけられると思われる。氏の講義は大半がノルウェー語でなされたため、後日、個人的に話を聞いたにとどまったが、氏の著書「リソース指向の音楽療法」によると、このアプローチは「エンパワメント哲学、ポジティブ心理学、及び最新の音楽学といった広く学際的な景観をなしており、協同と参加に重点を置いたコンテクスト的、関係的なもの」とされる⁹⁾。ノルウェーの音楽療法を代表するひとつの概念として、今後調べてみたい。

4.3 「育てること」

今回の GRS では、とくに音楽教育など周辺分野の発表者から、ノルウェー語、ドイツ語に共通する 'bildung,' という言葉と、それを補足する概念として英語の 'upbringing,' 'pedagogy' といった言葉が 'education' とは区別する形で聞かれ、これがノルウェーの教育哲学において重要な概念であることが感じられた。直訳すればドイツ語の 'bildung' は「育成、教育、教養、文化」、英語の 'upbringing' は「教育、しつけ」、'pedagogy' は「教授法」といった訳語になるが、前後の文脈から、知識を与えるのではなく、「人間として育てる」といった概念が含まれているように思われた。これは筆者の考える「療法」の本質のひとつと遠からず重なるものであり、今後追求してみたいと思った。

4.4 現象としての障害

GRS での発表の中に、博士課程のヘレ・バレ氏 (Helle-Valle, Anna) の注意欠陥・多動性障害児に関する発表「落ち着きのない子供たち：その最善の捉え方とはどのようなものか、また音楽療法の貢献できることは何か」(Restless children: who are they, how can they best be met and what could be the contribution of music therapy?) というものがあつた。この研究はまだ計画の段階ではあるが、GAMUT のプロジェクトのひとつとも位置づけられている⁷⁾。心理学者である氏は、「落ち着きのなさ」(医学用語では ADHD: 注意欠陥・多動性障害とされる) が、障害名や医学モデルによる診断基準だけでなく、くどくすることによって本質が捉えにくくなることに注目し、「ひとつの現象」として捉え直そうとしている。氏によれば、この「障害」を、関連専門職によるチェックリスト採点によってだけでなく、「音楽療法の関係的かつリソースフルな環境」のコンテクストで見るともっと違った、つまり「標準的であることから病理的であることまで広がったひとつの現象として」捉えることができるのではないかと考えられ、地元の幼稚園の音楽療法臨床に心理職として関わりながら研究を進めるとのことであつた。

この見方は、筆者の「関係」に重点をおいた臨床の視点に類似すると思われ、興味深かつた。

5. 症例の解釈方法について

3.でも述べたように、現在筆者が直面している最も重要な問題は、症例の解釈方法にある。これについて GAMUT の教授らとのコンサルテーションで話し合われたトピックスからいくつかを記す。

5.1 臨床者が研究者／解釈者となることと、内的妥当性について

本研究は、セラピストとクライアントの「関係」に注目している。しかし言語のない重度知的障害の子供を扱っており、質的研究の常道であるインタビューをとることができない。よって、得られる記述データは、「関係」の一端を担っている臨床者(筆者)の書いたものとなり、また解釈も同者によって行われることになる。これについて筆者は、「関係」に関する両者の内的経験に最も近いところにいる筆者自身の記述データを使うことのメリットを論じてきたが、研究としていささか閉塞感も感じる部分であつた。

今回のコンサルテーションでは、こうした設定自体について難色は示す意見はなく、質的研究としては成立するという感触を持ったが、内的妥当性 (internal validity) を確立する方法として、第三者のチェックを入れる方法が複数示された。実際の研究段階のどこで、どのような立場の人から、何についてチェックを受けるのかについてもいくつかの具体的アドバイスがあり、参考になった。

5.2 内的経験の捉え方の深さについて

筆者がこの研究の重要な追跡テーマと考えていることのひとつに、「巻き込まれること」「互い変化していくこと」「セラピストの個人的な内的経験が、臨床に作用するとともに臨床によって変えられていくこと」がある。5-2 の内的妥当性の考え方は理論的に整合性がある反面、「個人的な内的経験」に対してどう活かされるかについての議論はまだ深める余地があるため、これからさらに教授らとコミュニケーションをとっていきたいと考えている。

5.3 「現象の切り取り方」について

セラピストとクライアントの臨床的関係を解釈する際、データとなるセッション記録(及び映像)

をどう切り取るかについて、さまざまなアドバイスがあった。まず、5年半、100時間にわたる臨床記録（ビデオと書き起こし）から、実際に解釈の対象とする場面をどう切り出すのか、という問題がある。これに対しては、リアリスティック・サンプリング、目的的サンプリング、臨床者としての暗黙知によるサンプリングなどが選択肢として示された。次に、抽出された場面のどの要素をどう分け、どのような視点から解釈するのか、についても様々な考え方が示された。

いうまでもなく、この「現象の切り取り方」も、内的妥当性の点で説得力が問われる部分である。この点についてギルバートソン博士から、印象深いコメントがあった。それは、「正しいか、間違っているか」ではなく、「なぜこのような方法をとったのか」に視点を転換するべきであるという意見である。つまり、技法の形にこだわるのではなく、臨床で起きていたことの実感を最優先し、それを説明しながら、合う技法を確立することが重要だとのアドバイスで、論文全体の論調にも広く応用できるメッセージであると感じた。

5.4 「プレゼンテーション＝提示」と「アーカイブ＝記録」について

ギルバートソン博士とのコンサルテーションでもう一つ印象深かったのが、「プレゼンテーション＝提示」と「アーカイブ＝記録」についてのコメントだった。博士によれば、臨床や研究の中で生まれた表現媒体（比喻、イメージ映像、描画楽譜など）は、それ自身として生命と独立性を宿しており、何かの「代わり」や「表面的な提示媒体」ではないという。つまりそれは、もともとの現象を違う角度から見たもうひとつのオリジナル記録、アーカイブであり、よって、解釈を深めるほどに新しい側面を見せてくると言えよう。「表現による臨床」というものを考えるとき、大変興味深い見方であると感じた。

6. 音楽療法の研究方法の位置づけについて

6.1 研究の方法の概観

スティーゲ博士は、「ベルゲン大学の音楽療法は、ノルウェー政府から『コミュニティ音楽療法』と『研究』とを至上命題とされている」と語ったが、GAMUTはその「研究」の部門の体現と言えよう。そもそも音楽療法の臨床方法は極めて多岐にわたり、それぞれの直接関連領域も「医学」「教育」「リハビリテーション」「心理学」など全く異なるため、得てして関連領域の趨勢や社会経済的背景によって音楽療法手法の優劣を決定づけるような無用な議論が繰り返されてきた。今回 GAMUT を訪問し、今や音楽療法研究は、多様な視点や方法を包括的に捉え、補強し合いながら領域としての力を高め、そうすることで社会における市民権や基金を得る時代に入りつつあると強く感じた。そして、次のような関係図が洞察された。

6.2 「そぎ落とす」研究と「含める」研究

音楽が人間の身体や感情にどう影響を与えるのかについて、とくに医学モデルの研究者たちが行なってきた量的実証的研究は、基礎研究として音楽療法の発展に寄与してきた。しかしこうした研究では、純粋な結果を出すために変数を制御する必要があり、多くの臨床活動において前提となる「人間と人間のインターアクション」が取り除かれた形で音楽療法手法に限定されることが多い。このジレンマについては、ブラット博士の報告としてすでに述べた通りである。

一方、現在行われているような量的研究を、自然な設定の臨床現場のいわゆる「症例研究」に適用すると、なにがしかの結果が示されたとしても、そこに至るプロセス、すなわち音楽療法士の臨床技術で暗黙のうちに行われた療法の核の部分（演奏の微細な調整、タイミング、即興の内容、会話の語調など）が含まれにくいことになる。にもかかわらずそれが臨床研究の中心的存在となるのなら、音楽療法臨床者の無力感と失望感を引き起こさざるを得ない。

量的研究が、いわば還元主義 (reductionism) =そぎ落とす方向性にあるのに対し、質的研究は involve =含める方向性、それも単なる臨床的設定を超えて、対象者を取り巻く社会や文化まで広がっている図式が見てとれるが、この対立は音楽療法においてどのように解決できるのだろうか。

6.3 効果とプロセスの両方を取り入れようとする研究

今年の音楽療法世界会議（2011年7月、韓国）で発表された、スティーゲ博士とデンマークのリダー博士（Ridder, Hanne-Mette）との共同研究では、「音楽療法の実践を既存の無作為対照化試験に合わせるのではなく、音楽療法士が日常の実践の一コマとしてデータを収集できるよう、試験の方法を実践に合わせる」手法を提案している⁸⁾。このほかにも、今回の GAMUT で、質的研究と量的研究を組み合わせた研究をいくつか紹介された。

6.4 音楽療法のプロセスの独自性を精査し、「効果」そのものの意味を問い直す研究

ギルバートソン博士は自らの8年にわたる脳損傷患者への臨床の研究と筆者の研究の共通点についてコメントした際、「これは、即時的効果の出る臨床でなければ基金を出さない傾向のある社会への政治的提言 (political statement) とも言える」と語った。つまり、そもそも「医療」とは何か、「療法」

とは何か、「健康」とは何かという問いにまで踏み込んで、「効果」にとどまらない「物語」を敢えて示そうとする研究が生まれてきており、その方法が模索されているということである。しかし、数字をふりかざさずに、領域外の人びとに説得力のある研究を示すのは容易なことではない。目下、ひとつひとつの研究が、いわゆる質的研究の既存の方法を参照しながら、それぞれオリジナルな技法を創りだしているのだと感じた。今回、スティーゲ博士の「芸術におけるリサーチ」(artistic research)についてのシンポジウムにおける「リサーチ方法とは、在るものではなく、生まれてくるものだ」という発言は象徴的であった。

6.5 自らの研究姿勢の位置づけの明示と対話的研究

GAMUTがインターネット上で出版しているInternational Forum for Music Therapy, Voicesは、その投稿者への執筆ガイドラインのひとつとして「対話を推進する」(Encourage dialogue)ことを挙げているが、その説明は以下のようなものである。

Voicesの目的は、国際的な対話をすすめることであるから、投稿は国際的なやりとりに貢献するような考えを提供しなければならない。私達の考え方や実践はどのように似ていて、どのように異なっているのか？読者の反響を促すような問いかけをしていくことができる¹¹⁾。

筆者の前述の過去のプロジェクトの中で、「これは療法課題の達成の検証ではなく、関係性そのものを振り返るTh.の内省的プロセスである」という前提を述べている部分²⁾に対して、ギルバートソン博士は、「ある概念を提言するだけでなく、それに対立する概念を明示することは、論旨の展開に重要である」とした上で、「さらに、自分の用いる概念と対立する概念との『関係』まで示す」ことを示唆した。これは、研究というものが、その属する研究世界の全体を見渡すこと、現状を理解した上で自らの立ち位置を決めること、その立ち位置を用いる理由や理論づけを反対の立場との「関係性」の中で明らかにすることで、「対立的」ではなく「対話的」な研究となることができると理解され、有意義であった。

7. 本海外調査研究の成果の今後の公表の予定

以上のような成果は、博士論文の中の全体的方向性及び、症例研究部分の具体的手順に活かされる。また、GRSで発表した内容を改訂し、第43回日本芸術療法学会(2011年12月23-24日、東京芸術大学)で発表した。さらに、ベルゲン大学の音楽療法の動向について日本音楽療法学会の学会誌に投稿したいと考えている。

参考文献

- 1)生野里花(2010)「ある個人音楽療法セッションのプロセスにおける関係性の展開～重度知的障碍児と音楽療法士の双方に焦点を当てて～」『日本音楽療法学会第10回大会資料』38-39.
- 2)Ibid.
- 3)生野里花(2010)「関係性と意味性-重度発達障碍児との個人音楽療法の一場面の解釈の試み」『第42回日本芸術療法学会』資料
- 4)Antonovsky, A.(1987) *Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well*, Jossey-Bass Publishers. (山崎喜比古, 吉井清子(監訳) 2001 健康の謎を解く-ストレス対処と健康のメカニズム- 有信堂高文社)
- 5)Bruscia, K. (1998) *Defining music therapy second edition*, Barcelona Publishers. (生野里花(訳) 2008『音楽療法を定義する』 東海大学出版会)
- 6)Grieg Research School in Interdisciplinary Music Studies. <https://www.uib.no/rs/grieg> 2011年12月16日閲覧
- 7)Helle-Valle, A. *Restless children: who are they, how can they best be met, and what could be the contribution of music therapy.* <http://helse.uni.no/Projects.aspx?site=4&description=0&project=2603> 2011年12月16日閲覧
- 8)Ridder, H., Stige, B. (2011) *A joint research protocol for music therapy in dementia care*, *Music Therapy Today* vol.9, No.1, 90-91.
- 9)Rolvsjord, R. (2010) *Resource-oriented music therapy in mental health care*, Barcelona Publishers.
- 10) Ruud, E. (1980) *Music therapy and its relationship to current treatment theories*, Magnamusic-Baton. (村井靖児(訳) 1993『音楽療法』ユリシス・出版部)
- 11)Voices, *A world forum for music therapy.* <https://normt.uib.no/index.php/voices/about/submissions#authorGuidelines> 2011年12月16日閲覧

いくの(やまもと) りか／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

生野（山本）里花さんの今回の「学生海外調査研究」では、世界的に新たな音楽療法の方向性で研究する、ノルウェイ、ベルゲン大学のスティーゲ博士等とのディスカッション、および博士によって設立されたベルゲン大学グリーグ・アカデミー・音楽療法研究センター（GAMUT）での様々な研修を行なってきた。今回の大きな収穫は、生野さんがテーマとしている、音楽療法を「関係」と「意味」から研究する、ということがまったく異論なく受け入れられたことであろう。今回の渡航によって、音楽療法におけるこれまでの量的研究が **reductionism**、そぎ落とす方向性にあることに対して、質的研究が **involve**、すなわち含める、巻き込む、関わるという方向性にあるという、本質的な研究基盤が獲得できたことは、博士論文並びに今後の研究のために大きなことである。世界の最先端での研究に参加する足がかりができたことは重要であり、高く評価できる。今後を大いに期待したい。

（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科（文化科学系）・永原恵三）